

ピアノ アドバイザー



増谷 葵

小山市出身。

宇都宮短期大学附属高等学校音楽科、東京音楽大学器楽専攻(ピアノ)卒業、同大学院音楽教育専攻ソルフェージュ研究領域修了。第12回ヴィルトーゾピアノコンクール栃木プレミアムG級プロフェッショナル部門第5位(ヴィルトーゾ演奏賞)。これまでにピアノを小久保素子、石附秀美、ソルフェージュを石崎佳子、荒尾岳児に師事。

宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師、東洋大学文学部教育学科ピアノ指導員、東京音楽大学付属音楽教室助手。小山音楽家協会会員。

●演奏歴

2019年3月 Spring Concert～名曲の集まる喫茶店～（感動想像空間まつぼっくり）

2019年3月 第8回小山市新人演奏会（小山市立生涯学習センター）

2019年10月 あしぎん マロニエ県庁コンサート（栃木県庁舎 県民ロビー）

2019年10月 OYAMA オペラアンサンブル Special Concert＋Cavalleria Rusticana（白鷗大学本キャンパス）

2022年3月 Concert des Fleures -花々のコンサート-（山中邸音楽サロン）

2022年3月 第9回小山市新人演奏会（小山市立生涯学習センター）

2023年2月 手呂内愛翔・増谷葵 ジョイントコンサート（小山市立生涯学習センター）

2023年3月 Concert des Fleures -花々のコンサート-（山中邸音楽サロン）

最良な『冒険』のために -大演奏家から学ぶ-

1. はじめに

「ピアニストは冒険することを決して恐れてはいけない、ということです。わたしは、聴衆を前にして演奏するとき、冒険します。作品の精神を正しく伝えるために必要とあらば、冒険します。」これは、最も素晴らしい演奏家の1人であるウラディミール・ホロヴィッツが、若い演奏家へのアドバイスとして残した言葉です。本レポートでは、ホールで最良の演奏を続けていくための道しるべを『冒険』として、述べます。

また、私は演奏家として“謙虚な精神を忘れずにいること”を常に心に留めています。“謙虚な精神”は、“学ぶ姿勢を持ち続けること”にも値すると思います。今回は、尊敬する演奏家から演奏に対する姿勢を学び、それを吸収し、『冒険』の糸口となることを目的に執筆していきます。



2. 聴衆とのコミュニケーション

ホールで演奏する際は聴衆の存在があります。好ましい聴衆との関係性を築くことは、自ずと良い演奏に繋がるでしょう。ピアニストのダニエル・バレンボイムは聴衆との関係性を以下のように述べています。

人前での演奏が持つ危険性の一つは、聴衆を意識しすぎることである。(中略)演奏家と聴衆の間の最良のコミュニケーションは、演奏家が演奏を始めたとたんに聴衆を意識しなくなるというような状況で生じるものだと思う。聴衆は、演奏家が音楽に

だけ集中している時にこそ、演奏からもっとも強い音楽的メッセージを受け取るものである。

演奏家と聴衆は、コンサートの最中に会話をしてコミュニケーションを取ることとは不可能です。ホールで聴衆と共有できるものは自分が演奏している音楽です。そのためには第一に、自分自身とのコミュニケーションが必要です。作品に対してあらゆる準備をしてステージに立ちましょう。そして自分の音をよく聴きましょう。第二に、過度に自分自身をアピールしないように心がけることが必要です。例えば、楽譜を深く読み込んでいないがゆえに、作曲者の意図に反して、自由にアゴギクをつけたり、あるいは曖昧なフレーズの歌い方をすることなどは好ましくありません。聴衆は音楽そのものを聴きにきているため、作曲家が意図したであろう完全な作品像を崩さずに、私たちは自分の感情を乗せなければなりません。そうすることによって聴衆とも好ましい関係性が築きあがり、音楽の時空へと誘うことができるでしょう。余談にはなりますが、グレン・グールドがコンサートを拒否するようになった理由のひとつに、「コンサートは客席の反応に影響される」というものが挙げられるそうです。

3. 生涯、ホールで弾き続けること

演奏家である以上、生涯にわたりホールで弾き続けていくことが大切です。そのためには自分の音楽に対する姿勢を常に磨かなければなりません。具体的には、楽譜を読み込み、そしてそれを理想の音にする練習を積み重ねていきます。それによって、常に最良の演奏を目指すことができます。バレンボイムは音楽に対して以下のような考えを述べています。

私にとって音楽は自然と呼応するように流れて行くものであり、過ぎ去ったものとやがて訪れるものにかかわりながら流れて行くものである。

これは、過去と現在と未来に呼応しながら音楽は進んでいくということだと思います。演奏家は、過去に出した音を聴き、加味しながら現在の音を出します。そして次に来たるフレーズを意識します。こうしてホールで奏でられる音楽は、自然で自発性に富むものになるでしょう。

4. おわりに

ホールで最良の演奏を続けていくための道しるべを『冒険』として、そのためには、聴衆との関係性を築くこと、そして自分の音楽に対する姿勢を常に磨く必要があることを述べました。

冒頭に“謙虚な精神を忘れずにいる”と書きましたが、決して自分の演奏を卑下したり軽蔑したりすることではありません。1回1回のコンサートで自分の成長を確認し、成長した自分を認めることも必要です。そのようなことを繰り返し、私たちは次のホールへと向かうのです。



参考文献

神田 明

1991 『グレン・グールド大研究』(東京:春秋社)

青澤 隆明

2013 『現代のピアニスト30』(東京:筑摩書房)

バレンボイム, ダニエル(Barenboim, Daniel)

2003 『ダニエル・バレンボイム自伝 音楽に生きる』 蓑田洋子 訳 (東京:音楽之友社) [*A Life in Music DANIEL BARENBOIM.* (London: weidenfeld & Nicolson, 1991)]

マック, エリス(Mach, Elyse)

1985 『ピアニストは語る』 井口百合香 訳 (東京:音楽之友社) [*Great pianists speak for themselves.*] (n.d.: n.d., 1985)]